

NGOとして緊急援助活動をスタート

ミャンマー難民支援——AMDA(アジア医師連絡協議会)

92/6



「今回のバングラデシュ領内でのミャンマー難民支援プロジェクトは、私たちAMDA(アジア医師連絡協議会)が来年5月に予定しているアジア多国籍医師団結成に向けて、よいパイロット・スタディになると思う」

小誌2月号「特集 国際保健医療協力・NGO」で紹介したAMDAが、現在大きな国際問題となっているミャンマー難民に対する緊急援助活動を開始した。

本レポートは、出発前日と第一次派遣団一時帰国後に行われた記者会見からの報告。多国籍医師団構想は、日本のNGOとして初めての試みだ。

アジア13カ国に支部を持つAMDA

Association of Medical Doctors for Asiaはカンボジア

難民キャンプで活動した日本人医師・医学生がアジア各国の若手医師に呼びかけ、1984年にAMDAインターナショナルとして設立。日本人も含めたアジア人医師たちによるネットワークという医療専門の国際NGOだ。活動の特徴は、現在13カ国にある各国支部の医師たちが、自国内の医療活動に取り組みつつ、「アジアの友人」として対等な立場で、各国の民族的、宗教的風俗・習慣・文化の差に敬意を払った国際医療活動を展開することにある。現地の人々のニーズに合った永続性のある活動を行うために、当国支部の医師たちを中心に、ほかの支部は間接的に支援する形をとる。約400人の構成員は、韓国・台湾・フィリピンなどアジア13カ国に広がる。

「日本から現地に行つて、日本の医療を行うという従来の医療協力のあり方ではなく、各国支部の行う活動を彼らの指導のもとにその国の人々のニーズに合った医療を行うのがAMDAの精神」(AMDAジャパン・小林幸氏、国際医療情報センター所長)

今回もAMDAバングラデシュが活動の中心、AMDAジャパンとネパールが支援するものとなっている。

出発前日記者会見——4月9日(木)

軍事政権独裁によって少数民族の流出が続くミャンマーでは、バングラデシュにイスラム教徒が集団で流入。難民は3月中旬で1日1万人規模で増加しており、30万人に達する(週刊エコノミスト) 4月14日号)。食糧や水の確保の困難さ、住環境の劣悪さから栄養失調・下痢を主体とする消化器性疾患の発生や、マラリアなど感染症の流布など緊急医療援助を必要としていると報道された。

今回 派遣団はバングラデシュ保健省発行の許可証で、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)との協力関係のもと

活動する。既にAMDAバングラデシュのM.A.Jamini氏(バングラデシュより東大第1内科留学中)、AMDAジャパン・馬庭宣隆氏(バングラデシュ・チャンドラロン病院)が先陣として入国。UNHCRや彼らからの情報を総合すると、国境沿いに点在する6つのキャンプにUNHCRと2つの国際NGOが活動中。AMDAもキャンプ内に移動医療キャンプを設営、緊急医療・予防接種・健康教育を行う。第一次派遣団の役割は、現地状況の把握と今後の活動のための関係づくりであると記者会見で報告された。

先陣に続いて第一次派遣団として出発するのが、AMDAバングラデシュ代表・Naveem S.A氏(東大第2外科留学中・31歳)、AMDAジャパン・津曲兼司氏(菅波内科医院副院長・35歳)と野田信一郎氏(25歳)の3人。それぞれが抱負を語った。Naveem氏は、

「AMDAバングラデシュとしては初めての活動。日本に医学留学中のバングラデシュ人は100人近くいるが、その多くは将来アメリカに行つてしまふ。私は、留学生仲間と、絶対に国に帰るグループをつくらせている。将来のためにもこの活動は私の夢の第一歩」

と、プロジェクトに対する意気込みを語った。津曲氏は、「難民がどのくらいの期間で帰れるのかわからない。一応、6か月間活動を続ける予定だが、今後見通しがどうなるか現地の状況を把握してやる必要がある。後に続く参加希望者を広く求めたい」

と、日本の医療関係者の協力を呼びかけた。医学部在学中にAMDAの医学生版であるAMSA(Asia Medical Students Association)と出会ったという野田氏は、

「国際医療協力をライフワークにしたい。だから今回、初めてフィールドワークを経験するという意味では楽しみ」と、話した。

第一次派遣団帰国後記者会見——4月25日(土)

そして2週間後の4月25日、一時帰国したNaveem氏(16日帰国)、津曲氏(24日帰国)から現地の状況とAMDAの活



記者会見するAMDAジャパン。



第一次派遣団の右から津曲肇司氏、Nayeem S.A.氏、野田信一郎氏。

キーワード…アジア多国籍医師団

動の今後の見通しを報告する記者会見があった。

10日タックカ入りした第一次派遣団は、バングラデシュ総理府NGO局から公式な活動許可を得、12日から難民キャンプを一つひとつ視察してまわった。津曲氏が帰国する直前、バングラデシュのマスコミに発表された難民の数は26万2000人。ミャンマー国境沿いに1万17万人の規模の難民キャンプが12カ所、バングラデシュの町に難民が入り込んでいないため混乱こそ見られなかったが、いちはん規模が大きく水の便の悪い南部のキャンプで1日1000人程度難民が増加を続けているため(4月24日現在、井戸のある内陸のキャンプに1日2000人ずつ難民の移送をしている。救援活動は、バングラデシュ政府のRelief Commissionを中心によく組織化されており、政府関係者と国連・NGO(12のNGOが活動中)の代表が集まる会議が、毎週開かれていた。各キャンプでは食糧の配給やMedical Servicesも行われており、キャンプによって状況は異なるが予想よりも整然と救援活動が実施されていた。しかしながら、キャンプやシェルターの数が十分といえず、現地は今乾季で、気温は40℃近い。ほとんどの家族が、平地や丘に竹や灌木で家を組んだりシートをかけたたりして生活している状態。そのうえ、難民の45%が12歳以下の子供。低栄養や寄生虫、感染症の蔓延で下痢など消化器性疾患や皮膚疾患が多く、キャンプ内診療所の患者の40%は下痢。特に子供に有病率が高かったという。

第一次派遣団や現地のAMDAのメンバー(AMDAバングラデシュから計8人が協力中)は、政府のRelief CommissionやUNHCRと協議の結果、キャンプ内の一般診療活動のほかに、子供に対して寄生虫駆除のプロジェクトと健康教育を開始することを決定した。具体的にはキャンプと健康教育を15〜20家族に対して、手を洗うこと、トイレを使うことを絵で説明、子供たちにはその場で寄生虫駆除のためのシロップや錠剤を飲ませる。1日300〜500人の子供たちに健康教育と投薬が完了するペースで、4月24日からプロジェクトが始まったという。

「健康教育で、下痢や寄生虫はかなり減ってくるだろう」と、津曲氏は話す。

また、サイクロンの被害の大きいバングラデシュで、この地域にはサイクロンの直撃はないということだったが、5月から始まる雨季にかなり雨のふる地域であることにはかわりない。政府のRelief CommissionやNGOにはこの対策が皆無だったため、雨季に備えての緊急医療援助の対応も決めた。AMDAでは5月から6ヶ月間、毎月入れ替わり派遣団を送る。既に、バングラデシュ政府から、AMDAネパールのメンバーがバングラデシュ入りするためのビザが発行済み。活動は上々の滑り出しといえそうだ。

一時帰国したNayeem氏は、出発前の緊張とは打って変わって穏やかな表情も見せながら第一次派遣団の活動を報告。

「現地のAMDAバングラデシュのメンバーには、援助活動を早く始めたいという気持ちが強く感じられた。AMDAバングラデシュの初プロジェクトとして、成功を確信している」と話し、大きな成果を実感していることがうかがえた。また、津曲氏はこの活動がAMDAインターナショナルの多国籍医師団構想のパイロット・スタディであることに触れ、資金的な問題は抱えているものの、今回のバングラデシュではアジア多国籍医師団設立に向けて十分な手ごたえを得られたという。

AMDAの活動に関心を持たれた読者諸氏には、募金や問い合わせ先を記しておきたい。

- ◆プロジェクト募金口座
 - ①郵便振替口座番号：岡山5443800
 - 加入者名：AMDAミャンマー難民
 - ②銀行口座：中国銀行 一言支店
 - (普)1206026 AMDAミャンマー難民
- ◆AMDAジャパン東京連絡事務所
 - 〒242 神奈川県大和市西鶴間3-5-6の1-10
 - 小林国際クリニック 小林米幸(AMDAジャパン副代表)
 - tel:0462-63-1380 fax:0462-63-0919
- ◆AMDAジャパン
 - 〒701-12 岡山県岡山市榴津3-10-0の1
 - 菅波内科医院 菅波 茂(AMDAジャパン代表)
 - Tel:0862-84-7676 Fax:0862-84-7645